

記録集

第11回

雪舟サミット

in Yamaguchi

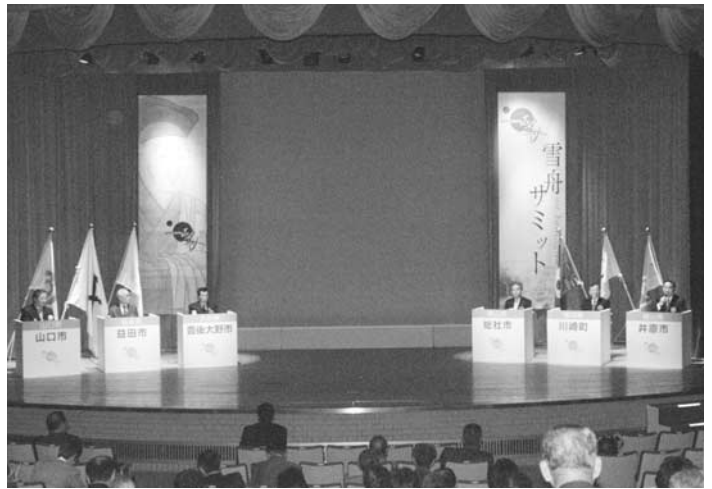
新しい価値を創り出す個性的なまちづくり  
〜歴史・文化を継承し、未来を創造する〜

SESSHU SUMMIT

雪舟

サミット会議

# サミット会議



(テーマ)

## 「新しい価値を創り出す個性的なまちづくり」 ～歴史・文化を継承し、未来を創造する～

(井原市)

今回から参加しております井原市でございます。平成の大合併により昨年の3月1日に新井原市が誕生しまして、前回までは芳井町として参加しておりましたが今回からは「井原市」として参加いたしますので今後とも旧芳井町と同様によろしくお願いいたします。

井原市は昭和28年4月に後月郡と小田郡の一部で計10カ町村が合併して市制を施行しました。以来、都市基盤、生活基盤の整備などの各種施策を推進し県西南部の中核都市として着実に発展してまいりました。そして、平成17年3月1日には、生活・経済・交通圏などで以前から密接な結びつきがあり、隣接しておりました旧後月郡芳井町と旧小田郡美星町の2町と合併しまして、現在の新「井原市」が誕生し、ただいま1年8カ月目が経過したところであります。そこで、この新しい「井原市」についてご紹介をさせていただきたいと存じます。

井原市は、岡山県の西南部に位置し、広島県に境を接しています。そして、岡山県の三大河川の一つであります高梁川の支流小田川が広島県に源を發し井原市の西部を西から東へ貫流し、その流域に開けた平野部に市街地が形成されています。また、北部は、標高200から400mの丘陵地帯で吉備高原へと続いています。地域の面積は243.36で、地形的には井原市街地を除いては、ほとんどが山々に囲まれた静かな農山村です。

歴史の上から見てみますと昔の国名で備中の国に属し

まして、山陽道が市内を横断し江戸時代には参勤交代などの宿場として栄えた所もあります。

雪舟と井原市の関係についてですが、雪舟の生涯には多くの説がとなえられており、終焉の地につきましても益田市や山口市などの説がありますが、「東福寺誌や吉備物語」などの文献によりますと雪舟は井原市の芳井町にあります重玄寺で没したと伝えられております。重玄寺というお寺は千畝周竹という和尚さまにより開かれた臨済宗仏通寺派の禅寺ですが、昭和30年に火災により全焼してしまいましたが、土蔵と鐘楼門は焼けずに残りまして、鐘楼門と石門は移築して再建されております。なお跡地は市の史跡として指定されています。また平成8年には、千畝和尚の語録「也足外集」という史料に雪舟の一族と思われる人物の名前が記されていることがわかりまして注目されております。

今から約800年前には源平屋島の合戦で平家の掲げた扇的的を見事射落とした源氏の武将、那須与一公がその功績で源頼朝から全国に5つの荘園の地頭職を拝領しましたが、その内の1つが井原市の東部を中心とした備中荏原庄でありました。市内には、与一公や一族の墓などゆかりの史跡が多く残されており、また、栃木県大田原市とはこの与一公がとりもつ縁で、昭和59年に友好親善都市縁組を締結し交流を深めております。この他、与一公にかかわる歴史的遺産を介しまして関係自治体が相互交流をはかり、友好親善を深めながら個性豊かな魅

力ある町づくりの推進を目指す「那須与一ゆかりの地」友好交流会議「与一サミット」を関係自治体持ち回りで開催しております。

また、毎年8月には那須与一をしのぶ古典芸能祭や西日本最大規模を誇る西日本弓道大会の開催など市内各地で与一公をしのぶ様々な行事が繰り広げられており、とりわけ弓道は井原市の文化として定着しております。

また、昨年5月にNHKの「そのとき歴史が動いた」でも取り上げられましたが、戦国大名で後の北条氏の礎を築いた北条早雲が生まれ青年期まで過ごしております。

北条早雲といえますと、近年研究が進みまして、備中国荏原荘、現在の岡山県井原市の領主であった伊勢盛定の次男 伊勢新九郎盛時として生まれたことが明らかになりました。

また、本年3月この北条早雲と父盛定ら、備中伊勢氏の菩提寺である井原市の「法泉寺」の古文書21通及び伊勢盛時禁制札の一面が岡山県指定重要文化財に指定されております。

なお、毎年「北条早雲」にゆかりのある高越城址で早雲をしのぶ早雲まつりが地域住民の手で守り伝えられるとともに早雲公にゆかりのある全国3市2町が連携し、その偉業や魅力を活用した観光事業を共同で行うための「北条早雲観光推進協議会」を設立しまして、NHK大河ドラマ化の実現に向けた誘致活動などを展開しているところです。

「ねんねこしゃっしゅりませ」の旋律で始まる「中国地方の子守唄」の発祥の地は井原市です。遠い昔から現在の井原市高屋町で歌い継がれてきました。そして、この唄にとっても感動した山田耕筰氏が「中国地方の子守唄」として編曲し、日本を代表する子守唄になりました。

市民会館の時計塔からは毎日ミュージックチャイムとして子守唄のメロディーが流れています。

井原市は、近代彫刻界の巨匠「平櫛田中」生誕の地でもあります。「いまやらねばいつできる、わしがやらねばたれがやる」の名言は皆さんご存知だと思いますが、

平櫛田中は、明治5年に井原市西江原町で生まれました。少年期に木彫に興味を覚え、明治26年に中谷省古

に弟子入りして木彫の手ほどきを受けて以来、百歳をこえてからも現役の彫刻家として活躍しました。

その芸術の特徴は、優れた写実力と深い精神性、そして彩色にあるといえるでしょう。初期の作品は、日常周辺の人物をテーマとした身近彫刻で、作者の人間性が感じられます。

なお、井原市にあります田中美術館は、近代彫刻界の巨匠・平櫛田中の作品を保存展示して、永くその偉業をたたえるとともに、郷土文化の向上に役立てるため昭和44年に開館しました。

昭和48年には博物館法により登録され、「田中美術館」と改称し、昭和58年には井原市の市制30周年を記念して新館を開館しました。

所蔵品は、生前に田中が市内の小・中・高校へ寄贈していた作品や、「田中館」の開館により新しく寄贈された作品と、田中歿後遺族から贈られた遺作・遺品を中心としまして、田中との関係の深い日本美術院の作家や百寿を迎えた田中の寄付により設けられ、昭和47年から始めております「平櫛田中賞」受賞作家の作品があります。

また、田中作品の中で、代表作である「鏡獅子」高さ2メートルの作品は歌舞伎舞踊「春興鏡獅子」の略称で、九代目市川団十郎によって創案され、六代目尾上菊五郎により絢爛たる出し物として完成されたものであります。

田中は、制作に先立ちまして、歌舞伎座の公演に25日間通いつめ、毎日客席の場所を変えてはさまざまな角度から六代目の舞い姿を観察し、ポーズを決めました。

「鏡獅子」は国立近代美術館が所蔵しており、国立劇場に永久貸与しています。

また、井原市は、日中友好のために一生を捧げた「内山完造先生」生誕の地でもあります。日中友好の架け橋となった内山完造は明治18年、井原市芳井町に生まれました。28歳で上海に渡り、抗日運動の中にあって中国のよき理解者として精力的な活動を展開しました。

内山完造の経営した上海内山書店は、魯迅や郭沫若ら第一級の文化人が集まる国際交流のサロンとなり、書籍を通じて知識人・学生らが友好を深める窓口となりました。

た。

また、戦後の昭和23年からは、中国と中国人の真の姿を理解してもらおうと日本全国、北から南まで800回を超える講演をして廻り、日本と新中国の友好関係の一日も早い実現を大衆に訴え続けました。

昭和25年には日中友好協会の初代理事長に就任します。日中友好と魯迅精神の伝達、平和運動などに全勢力を投入し、また中国残留日本人の帰国交渉のため北京へ赴くなど、多大な貢献をされました。

現在では、上海にある「魯迅記念館」の2階に内山書店が再現されていて、今も完造氏の功績が市民から慕われております。

最近の井原市での話題と申しますと、昨年10月24日・25日に岡山県で開催されました「晴れの国おかやま国体」におきまして、井原市が秋季大会新体操競技会の会場になりました。少年男子の部では、地元精研高等学校と井原高等学校の生徒からなる岡山県チームが悲願の初優勝を成し遂げ、町は新体操で沸きあがりました。

また、今回井原市での国体の成功は、さまざまな面から競技会を支えた係員の皆さんや、全国から集う選手たちを迎えた民泊協会の皆さんの長期間にわたる地道な努力がなければあり得ませんでした。

なお、今年の全国高等学校総合体育大会「インターハイ」におきましては、井原高校・精研高校による岡山県チームは精研高校時代を含めまして2年連続2度目の優勝を成し遂げております。

また、昨年の12月25日に京都、西京極陸上競技場を発着点に行われまして多くの皆さんもテレビでご覧になったことと存じます「女子第十七回全国高等学校駅伝競走大会」に井原市の興譲館高等学校が岡山県の代表として出場し、大会歴代2位というすばらしい記録でみごとに全国制覇を成し遂げました。

興譲館高校の全国大会への出場は、昨年で7年連続7回目でありまして、創部7年目にして悲願の優勝。そして岡山県勢としても初の優勝という快挙は、岡山県民に多くの感動と勇気を与えてくれたところでもあります。

井原市の特産品の紹介をいたしますと、井原市は古くから綿花の栽培が盛んな地域でありました。そのため備

中紺木綿が特産品となりまして繊維産業を中心に発展してきました。この伝統を受け継ぎ、昭和40年代以降はジーンズの生産が盛んになり、「ジーンズのふる里」として親しまれ、また「ジーンズのまち」として全国に発信しております。

また、井原市芳井町の明治地区の特産物に、「明治ゴボウ」があります。

当地の重粘な赤土の土壌で作られたゴボウは味と香りがよく、また肉質がち密なことから歯切れが良く、日持ちすることが特長です。

さらに、西日本有数のぶどう産地、井原市青野町で栽培されているピオーネ、ニューベリーA、瀬戸ジャイアンツ、そして、芳井町で採れるニューピオーネは、大粒で食べやすく、口の中で甘さとほのかな酸味が調和してその味はまさに絶品です。

井原市美星町の高原ですくすくと育った乳牛からしぼった成分無調整でコクがあっておいしい美星牛乳、また乳製品では、アイスクリーム・ヨーグルト・レアチーズケーキも好評を博しております。

市内のみどころと言いますと、さきほど「平櫛田中先生」のところで紹介しました「田中美術館」、竹内栖鳳の門下の日本画家「金島桂華」の作品を中心に「横山大観」や「梅原龍三郎」など近現代の画家の作品を多数収集している「華鶴大塚美術館」、北条早雲ゆかりの「高越城址」や「那須与一ゆかりの永祥寺」、自然の中で家族で楽しく過ごせる「経ヶ丸グリーンパーク」、名勝天神峡、桜溪塾跡公園、吉備高原一帯にみられた中世の村の様子を再現した「中世夢が原」、口径101センチの反射望遠鏡を備えた「美星天文台」、「国指定名勝鬼ヶ嶽」とれたての野菜や農産加工品・乳製品を販売している「星の郷青空市」、お参りをすれば嫁の手を煩わさずに健康で生涯を全うできるとされている「嫁いらす観音院」などがあります。

また、平成11年1月11日に開業した鉄道井原線が市内を東西に走っており、高架を走る車窓からの眺めは格別であります。

井原市の主要な施策についてお話しすると、合併2年目を迎えて新井原市としての一体感をさらに深める

よう地域の交流を支える交通ネットワークとして市内循環バスなど公共交通機関の整備をはじめ、国道や県道の整備促進、市道の整備など地域間の交通機能の向上を図っております。

また、情報化先進都市づくりを支える基盤として、双方向化の支援や井原市役所本庁と支所や出先機関等の光ファイバーでの接続や電子市役所の構築など、情報ネットワークの構築を進めております。

地域性を活かした良質で利便性の高い住宅や宅地の整備を通じて、快適な定住環境の形成を進めるべく、市内に「四季が丘団地」を造成しまして、居住ゾーンにおける宅地分譲の促進や産業ゾーン、そして福祉ゾーンの機能充実による福祉のまちの実現を目指しております。

なお、同団地の第一期分譲118区画を平成17年1月より分譲開始しておりますが、現在まで90区画を超える分譲が完了しており、大変好評を博しております。

さらに、市民農園や産地直売品展示や販売施設などの整備を進め、地域の賑わい拠点としての機能強化を進め、県営による広域営農団地農業の整備を促進して農林業生産基盤の整備を進めております。その例としまして、「星の郷青空市」の体験交流施設・イベント広場・加工場の整備等を考えております。

本年は雪舟没後500年記念事業としまして、5月には「雪舟没後500年記念事業実行委員会」によります記念講演会が開催されました。

講師は、前九州国立博物館副館長の宮島新一先生をお願いしまして「雪舟 謎と浪漫」という演題でご講演をいただきまして、井原市内外から450名という多くの参加がありました。

なお本年は「井原市芳井歴史民俗資料館」で特別展として「雪舟没後五百年記念 重玄寺宝物展」を本年10月15日から11月26日まで開催いたしております。

また、芳井町先人顕彰会では、中学生作成による「水墨画」を本年11月に開催の「芳井ふるさと祭り」で展示する予定です。

以上井原市の紹介、取り組みにつきましてご報告させていただきました。本日まで参加されておりますそれぞれの市長さんや町長さんのお話をお聞きしまして、いろい



ろ参考にさせていただきたいと考えております。

なお、今回の雪舟サミットの開催につきまして大変お世話になりました開催地であります山口市をはじめサミット関係の皆様にご心から感謝申し上げます。終わりとさせていただきたいと存じます。ありがとうございました。

#### (川崎町)

ただいま、ご紹介いただきました川崎町助役の元永高美でございます。本来でしたら町長がこの場で皆様にごあいさつ申し上げるべきところですが、本日から明日まで川崎町では総合文化祭が開催されており、かわって出席をしました。

よろしく申し上げます。

#### (町の概要)

川崎町は九州福岡県のほぼ中央にあります。福岡市と北九州市のほぼ中間にある筑豊地域の中でやや南よりに位置し、東西4.9km、南北12.6km、総面積36.12と南北に長い地形をしています。人口については、石炭産業最盛期の昭和33年は、43,000人を超えていました。それをピークに減少に転じて、現在は人口約21,000人弱、世帯数は約9,600世帯です。かつては大小数多くの炭鉱を有する石炭産業の中心の町でしたが、エネルギー改革に伴う石炭産業衰退後の現在は、豊かな自然に囲まれた特性を活かし、農業を中心に自然と共生し活力あるまちづくりを進めています。

その他の産業では、ベルギーで開催されているモンド

セレクションで、金賞を受賞した醸造酢会社マルボシ酢や、県内に30店の店舗を有する食料品スーパーマーケットの本社などがあります。国道322号沿線に大小の小売店の進出が目立っています。後ほどにも紹介いたしますが食肉加工場の建設も始まっており、徐々にではありますが産業振興も進んでいます。また、豊富な自然環境と、福岡市北九州市近傍に位置している利点を活かし、国指定の藤江氏魚楽園、「体験型農園ラピュタ」など観光産業も広がりを見せています。

#### （特産品）

特産品については、近年の自然志向による、産地直産品の需要からイチゴ、なし、ぶどう等の生産が盛んに行われています。特にイチゴは近年『赤い、丸い、大きい、うまい』をキャッチフレーズに「あまおう」という品種に切り替え、生産量も順調に伸びています。

これら果物をはじめ、地元で採れた新鮮な食材を提供しようと、2年前に川崎町農産物直売店「De・愛」がオープンしました。その翌年には、隣に農産物加工所が完成し、農家の婦人たちが、「JA田川 川崎町農産物加工部会」を組織して地産地消のもと安全にこだわった農産加工品を製造販売しています。なかでも赤の稲穂も美しい古代米を使った「赤米チップ」は、なかなか好評を得ています。赤米チップやみそ、梅干、ゆずこしょうなどを詰め合わせた「ふるさと便」も、進物にたいへん喜ばれ、近頃では海外へのお土産などにも使われているようです。

また、パンや餅、弁当などの製造もされ、しいたけや筍といった地元産の食材を使用したお弁当は、食品添加物などを一切使わず安全で、ヘルシーなことでも人気を集めています。これらの商品を販売している「川崎町農産物直売店 De・愛」は、秋の紅葉の季節を迎え来客数も増加し賑っています。

#### （観光名所）

観光名所としては、豊かな自然環境と文化財を活かした安真木地区の観光開発を柱としています。その中でも今年度完成します雪舟ロードは、農産物直売店「De・

愛」から雪舟ゆかりの地「藤江氏魚楽園」を結び、全長約2.5kmの「サイクリングロード」です。

これを中心に、子供からお年寄りまでゆっくりとくつろぐことのできる温泉施設「英彦山湯～遊～共和国」があります。また、町の最高峰標高700メートルの戸谷ヶ岳のふもとにあります「戸谷自然ふれあいの森・キャンプ場」は、夏休みになりますと町内はもとより県外からもたくさんのお客様がおみえになります。夏の避暑はもちろん、森林浴には最適かと存じます。リピーターの方も多く、川崎町の自然を満喫しリフレッシュしていただける場所です。この戸谷自然ふれあいの森には、観光りんご園があり、「つがる」「ふじ」の銘柄のりんごは、約130人のオーナーにより9月と10月の2回収穫祭が行われています。県内外から2,000人近い人々にぎわい、自分のリンゴの木からの収穫には、皆様とても感動をされ喜ばれています。

また、先程の「農産物直売店De・愛」は、「日田彦山線活性化推進沿線自治体連絡会」が「JR九州」と協働して行っている、ウォークラリーのコースに組み込まれ、お客様に喜ばれています。このほかにも温泉付帯レジャー施設「英彦山湯～遊～共和国」や農村と都会の融和をめざす、ブドウ、なし狩りも体験することのできる「ラピュタファーム」。ここでは、自家野菜を使うレストランやパン工房までそろっています。テレビの情報番組や情報雑誌に登場したことから、お客さんも多く中には毎週未来られる人もいます。

このように川崎町といたしましては都市住民をターゲットに、かつての観光施設を訪れる訪問見学型の観光ではなく、ゆっくりとした「くつろぎの癒し型観光」を目標に最近注目の口ハスな生活を目玉にした新たな観光振興に努めています。

#### （主要事業）

川崎町の未来に向けたまちづくりの目標として、『いきがい・ふれあい・安心のまち』を基本コンセプトに、「人にやさしい健康と福祉のまちづくり」、「心豊かな教育文化のまちづくり」、「活力ある産業のまちづくり」、「自然と共生したまちづくり」、「豊かで夢をもてるまち

づくり」を基本目標として、新しい町づくりをめざしています。

地域経済の振興については、石炭産業衰退以降、地域経済の振興を図るべく基幹道路や工業団地整備など、さまざまな基盤整備をおこなってきました。しかしながら、全国的な景気低迷、産業空洞化や輸入自由化による農産物の増加など、本町の経済環境は厳しい状況にあります。このような情勢の中、地域経済の浮揚、雇用の確保について積極的に行うとともに工業団地への企業誘致、既存企業が開発する食品開発や生産性の向上への支援を行い、企業が進出しやすい環境づくりを進めています。

人にやさしい健康と福祉のまちづくりの観点からサイクリングロードを建設しており、今年度には、全長約2.5kmの「雪舟ロード」が完成いたします。

活力ある産業のまちづくりでは農産物加工施設整備事業を進め、地元の農産物や既存の事業者の有効利用のため「農産物直売店De・愛」に隣接して「パン、もち、惣菜など」の加工施設が稼働しています。

また、営造物建設事業（貸工場の建設）によって食酢製造工場が完成し、かぼすしょう油、かぼすドレッシングや、缶チューハイに使用する柑橘系原材料などの製品が生産されます。現在建設中ですが食肉加工工場が完成すれば、豚肉の加工が行われ、大手食肉メーカーに納入される予定です。将来的には、かぼすやゆず等の原料、その他の食材等の原材料生産から加工、そして最終的な販売までを総合的に行い、地域の活性化をめざし地元ブランド化を完成させ新たなまちづくりへの発展へつなげようとしています。

#### （ゆかりの地概要）

川崎町に国指定名勝「藤江氏魚楽園」があります。魚楽園の名称は、仏教の経文の中より「魚楽しければ、人もまた楽し」という文から名づけられたもので、人も魚も鳥たちもすべてが大自然の中に調和した桃源郷を意味しています。

この庭園は、僧雪舟が九州を旅した際、この地にしばしば足を運び築庭したと伝えられ、天然の山を利用し、池を庭の中心に石を組み、ツツジを配し、背景となる山の



楓、赤松、杉などの樹木と調和して、古園のたたずまいを見せています。

#### （雪舟とのかかわり）

雪舟は文明元年（1469年）明より帰国しましたが、当時京都は応仁の乱で、荒涼とした戦場になっていました。どこかに安住の地を求めていた雪舟の元へ豊後の大友親繁よりの招きがあり、身を寄せて「天開図画楼」というアトリエで画道に精進したようです。

この時期に隣の添田町英彦山や本町にやって来たと思われる、藤江家に来遊したようです。このような魚楽園も町の中心部から5km程の山間辺地にあるため、知る人は少ないようです。規模としては英彦山の亀石坊のほうが大きかったかもしれませんが、全体の姿を現代に残しているという点では数少ない存在といえましょう。

#### （まちづくりへの活用）

まちづくりへの活用ですが、まず雪舟ゆかりの川崎町を町内外に知らしめることを目的に、平成12年度から隔年で開催している日中交流水墨画公募展が、今年で第4回目をむかえます。ちょうど本日と明日の2日間にわたり町民文化祭と同時開催し、両日にわたり揮毫会の実演も行われ多数の来客が見込まれます。川崎町としては、生の水墨画を子供たちに直に触れさせることによって感性を高め、古典的文化に触れさせることによって、これからの時代を担う青少年の健全育成に努めていく所存であります。

また、平成12年4月、町民の中から魚楽園を中心とし

たまちづくりの機運が高まり、「雪舟さんの魚楽園顕彰会」が設立されています。今年もこの顕彰会が「雪舟さんの紅葉祭り」を開催し、野点や特産品販売など、家族連れなど多くの観光客でにぎわいをみせるものと思っています。雪舟さんの足跡を訪ねるとともに、文化遺産や観光施設を巡り、再度川崎町を見つめ直し、健康づくりも兼ねた「ひたひこウォーキング」などの開催をとおしての観光開発も行っています。

今回の雪舟サミットのテーマであります「新しい価値をつくり出す個性的なまちづくり～歴史・文化を継承し、未来を創造する～」についてであります。産炭地であります本町は、かつては、文化不毛の地とさえ言われ、町民一丸となって文化の振興に努めてまいりました。

文化遺産である「雪舟庭園・魚楽園」を観光拠点として「都市と農村との交流促進」を図ることでまちの活性化、発展へつなげようとしています。

また、本町には町制10周年を記念して作られた「川崎音頭」というのがありまして昭和40年代まで歌い継がれてきましたが、その後、途絶えてまいりました。

この川崎音頭を次世代に歌い継いでいくために、郷土芸能フェスタ「ヨイトサッサで川崎音頭」として、本日開催の本町の文化祭で現代風にアレンジして発表されることとなっています。

世代交代が進む中、まちのいろいろな歴史や文化が、後世に継承され、守られていくことを願ってやみません。

そのような中で、また、新しい発想も必要ではないかと思っています。

雪舟さんゆかりの川崎町として、「住民との連携と協働」を基本に町民の皆さんと協力し本町にしかない、個性的なまちを創造するまちづくりを行っていきたくと思っています。

最後になりましたが、本サミットに参加の皆様方の貴重な報告を拝聴することが出来たことは、これからのまちづくりにおおいに役立てたいと思います。

今回のサミットにご尽力いただきました山口市の方を始め、関係者の皆様にご心から感謝申し上げまして、報告を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

#### (総社市)

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました岡山県総社市長の竹内洋二でございます。

第11回目となります雪舟サミットの開催にあたり、山口市長さんをはじめ、関係の皆さん、また市民のみなさんのご尽力で、このように素晴らしいサミットが開催されることを心からおよこび申し上げます。また、明日は雪舟筆の国宝6点が展示される山口県立美術館の特別展覧会の見学や国民文化祭の視察ができると聞いており、大変楽しみにしております。

それでは、本市のご紹介をさせていただきます。

#### (総社市の概要)

総社市は、岡山県南に位置しておりまして、県下2大都市の岡山市、倉敷市に隣接していることもあり、人の交流の多いまちでもあります。気候も温暖で、市内中央を流れる高梁川に代表される豊かな自然と吉備文化発祥の地として、多くの文化遺産にも恵まれています。

山陽自動車道、岡山自動車道をはじめとするさまざまな国・県道や、伯備線、吉備線及び井原線の3本の鉄道が通り、また、岡山空港が近いことなど、中四国の広域的交通の結節点ともいえる位置をしめており、平成13年度から順次整備を進めていた総社駅の東口に新しい駅前広場が完成しました。面積約5,000のゆったりとしたロータリーが整備され、大型バスの乗り入れも可能となりました。人と車の流れが交差しないよう駅を利用する人の安全面にも配慮され、高齢者や障害者にも優しい広場となっています。公共交通機関の交通結節点としての機能が充実したので、たくさんの方にお越しいただきたいと思っております。

また、滞在型吉備路観光の拠点となる「国民宿舎サンロード吉備路」やそのすぐ隣の「きびじつるの里」、2,565平方メートルという県下2番目の面積を誇るメインアリーナをもつ体育館「きびじアリーナ」によるスポーツ振興、また幹線道路整備など、活気あふれる快適都市をめざした整備を進めています。

また、平成17年3月22日に総社市、山手村、清音村の1市2村による新設合併により、新「総社市」が誕



生し、現在、今後のまちづくりの指針となる本市最初の「総合計画」を策定いたしました。

#### (特産品)

それではまず、本市の特産品ですが、果物大国岡山の代表であるぶどうや桃、それから赤飯のもととなったといわれる古代から神々に捧げられた赤米から作ったお酒やうどん、白甘藷のきびみどりで作った麺、焼酎やまんじゅう。きびみどりを加工した際のおいしさに加え、身体にもとても良いということで訪れる人にも喜んでいただいています。

雪舟にちなんだ最中やせんべいもありますので、ぜひ総社市のホームページをご覧ください。

#### (総社市の歴史)

次に、本市の歴史に簡単にふれさせていただきます。総社市周辺は、古代から吉備の国の中心として栄えてきました。全国有数の巨大な古墳や数千基もの古墳群が、当時の繁栄を今に伝えています。

飛鳥、奈良時代には、国府や国分寺、国分尼寺が置かれるなど、備中の国の中心となりました。また、桃太郎伝説のもととなったといわれる温羅伝説が残る古代朝鮮式山城である鬼ノ城は、鬼城山ビジターセンター、鬼ノ城の西門が復元され、周辺を散策できる「ふるさと自然のみち」も整備し全国から脚光を浴びています。

平安時代末期には、備中の324社を合祀した総社宮が造営され、この門前町が市街地形成の素地となっており、市名の由来にもなっています。

#### (雪舟ゆかりの地)

雪舟生誕地 本市と雪舟さんとのご縁でございますが、雪舟さんはみなさんご存知のとおり、本市の赤浜という所で生まれました。この地には、地元の人々により雪舟の生誕の碑が建てられています。今後、雪舟生誕地公園として整備する計画もあります。

井山宝福寺 また、雪舟さんが少年時代修行したといわれる井山宝福寺には、絵ばかり描いて修行をしない雪舟さんをこらしめようと柱にしばったところ、涙で本物

そっくりのねずみを描いて、和尚さんをびっくりさせたという逸話が残っています。

雪舟にちなんだ取り組み 次に、雪舟さんにちなんだ取り組みをご紹介します。総社市では、雪舟を顕彰する事業やイベントも多数行われています。その中でも有名なのが、「雪舟の里総社 墨彩画公募展」です。日本各地をはじめ、外国からの応募もあり、ワールドワイドな展開を見せています。また、回を重ねるごとに集まるレベルの高い作品に、審査員も期待と感嘆を隠せません。なお、これらの優秀作品のうち雪舟大賞・審査員特別賞・特選などは、総社市文化振興財団で買い上げ収集しています。

また、2006年は、雪舟の没後500年に当たることから、「雪舟没後500年顕彰市民会議」を開き、雪舟新聞の発行や記念切手、記念まんじゅうの発売など年間を通し市民とともに雪舟を顕彰し、「画聖雪舟の生まれたまち」としての総社市を内外にPRしています。

#### (サミット会議テーマ)

「新しい価値をつくり出す個性的なまちづくり～歴史・文化を継承し、未来を創造する～」

さて、それでは、今回のサミット会議のテーマである「個性的なまちづくり」について、少々お話をさせていただきます。

昨今、「地方の時代」と言われるとおり、それぞれの地方公共団体ごとの特色ある施策が目立っています。「個性的なまちづくり」を進めていくためには、まず自分のまちを知ることが必要だと思います。「まちを知る」



といっても何を知ればいいのでしょうか。まずまちの歴史を知ることだと思います。まちの個性や特性を知る上で、まちの歴史を知ることが欠かせないことです。先人がこの地で生きていくために努力した工夫や営みの中に、この地を現代に生かすヒントをたくさん発見することができます。

次にまちの宝物を知ることです。自然・歴史・文化・産物・人など、宝物探しをすることで今まで見えていなかった自分たちの住む土地の宝物がたくさん発見できます。この宝物探しによって地域と人がつながれていくのです。

そして最後にまちの人を知ることです。地道にその道を追及してきた人やユニークな特技や経験を持っている人を探して、地域の名人・達人の人材バンクをつくることは、さまざまな分野に役立つ機会を提供することになります。

このようにまちを知ることでもちの生かし方が見えてくるものと思います。

それでは、その取り組み事例として、本市が行った事業をひとつ紹介したいと思います。

#### 「れとろーど」の紹介

この「れとろーど」は、毎年秋に行われる「総社市民文化祭」の目玉イベントとして、今年で2年目を迎えました。復古調の「レトロ」と未来へ続く道「ロード」から名付けられました。

その舞台となった総社商店街は、総社宮の門前町として栄え、その歴史を今に伝えています。昨今は、車社会の時代の流れの中で、全国各地で見られように、昔のような活気は失われています。しかし、この歴史と文化ある総社商店街を未来に伝えることができないか。地域の人々が自ら賑わいを作り出そうと、商店街に活気を呼び戻した物語です。

#### （歴史を知る...）

総社商店街は、古くから総社宮の門前町として形成され、近世中期の頃から、松山往来の宿駅として急速に繁栄しました。豪商などの商家が軒を連ね、市場には近く

の村里から人と物が集まって、賑わいを見せていました。また、各地から詩や書、絵を書く人たちがこの地を訪れ、文化の花を咲かせました。文化も経済も共に栄えたのが総社の商店街でした。

昭和30年代の商店街は、当時生活に必要なものは、商店街に行けば大抵手に入れることができ、映画館や銀行、病院などもあり、市民の毎日の生活を支えてくれています。このころには、土曜夜市も開催され、大勢の人出で賑わいました。

#### （宝物を知る...）

この辺りは、仁徳天皇の皇妃八田皇女<sup>やたべ</sup>の名代の地として、八田<sup>やたべ</sup>と呼ばれていました。平安時代末期、備中国内のすべての神社を一箇所に集めて総社が建てられ、この総社が後に総社宮となり、付近の地名として呼ばれるようになり、現在では総社市の市名にもなっています。

また、れとろーどの舞台となったこの町筋は、かつての松山往来であり、今も往時の繁栄をしのばせる町家風の建物などが点在します。

その一つが、まちかど郷土館です。これは、明治43年に建築された旧総社警察署の建物で、現存する市内唯一の明治洋風建築です。八角形の楼閣風の入り口が明治の雰囲気<sup>やたべ</sup>を漂わせています。昨年11月、建物のデザインが優れているとして、国の登録有形文化財に登録されました。

また、この商店街の道筋には、12の石柱「史跡探訪の碑」が建っています。この石柱は、総社宮門前町の歴史と先人達の業績を印すため、建てられたものです。そこにふと足を止めてみると、彼らの時代にタイムスリップするような心地になります。

#### （まちの人を知る...）

商店街を見守る人々と市行政との協働の活動をご紹介します。

歴史と未来の通り道としてのこの商店街では、次の世代に残すまちづくりを進めようと、商店街の住民自らが、総社商店街地区街づくり協定を結んでいます。この協定は、地域住民や商店街を訪れる人たちに、憩いと潤いの

ある環境を作り出し、商店街を活性化しようという思いで結ばれました。古い町なみの雰囲気を活かした、統一感のとれた景観作りを行ったり、家屋の建て替えなどの際には、道路の境界から2メートル後退するなどの基本方針を定めています。これに対し、市としても「街なみ環境整備」としてバックアップを行っています。今回の「れとろーど」では、こうして新たに生み出されたスペースを活かして、生け花や彫刻の展示などが行われ、大勢の人たちの目を楽しませてくれました。

以上、わがまちのまちづくり事業を例にお話してまいりました。

終わりにになりましたが、本サミットを通して、サミット構成市町の交流がますます深まることを祈念いたしますと共に、お集まり皆様の今後ますますのご発展、ご健勝をお祈り申し上げ、雪舟さん生誕のまち、総社市の紹介とさせていただきます。ありがとうございました。

### (豊後大野市)

大分県豊後大野市収入役の安東忠司でございます。本日はここ山口市において第11回雪舟サミットが、第21回国民文化祭の開催とあわせまして、このように盛会に開催されますことにつきまして、心からお喜びを申し上げます。

それでは本日のテーマであります「協働する魅力ある地域づくり」について、まず最初に豊後大野市の概要について、報告させていただきたいと存じます。

豊後大野市は、平成17年3月31日に大野町を含む三重町、清川村、緒方町、朝地町、大野町、千歳村、犬飼町の5町2村が合併して誕生しました。

当市は、大分県の南西部、大野川の中・上流域に位置し、東西約22キロメートル、南北約31キロメートル、総面積は、603.36平方キロメートルであり、県下で3番目の面積を有し県土の9.5%を占めております。

人口は平成17年10月1日の国勢調査によりますと41,548人となっており合併時より、1,500人程度の減少が見られているところです。

西部は阿蘇外輪山のすそ野、南は祖母・傾山、三国峠などの山岳地域により囲まれた盆地状をなしています。

地形的、地理的には必ずしも恵まれているとは言えませんが、起伏に富み、かつ複雑な地形をなしていますが鎮田<sup>ちん</sup>田<sup>た</sup>瀑<sup>ばく</sup>図<sup>ず</sup>の画題となった大野川の豊かな水利を受けて、県内屈指の畑作地帯として農業を中心に栄えて来たところでもあります。また、神角寺・芹川県立自然公園、祖母・傾国定公園によって囲まれており、有形、無形の地域資源に恵まれた名水・田園・観光のふるさとでもありません。

気候は南海型気候に属し、平地気候と山地気候のほぼ中間にあり、四季を通じておおむね温暖で、一部の山岳地帯を除いては、平坦地域の平均気温は15~16と極めて農耕に適しており、古くから農業を基幹産業として発展してきました。特産品は、しいたけ、葉タバコ、豊後牛、かんしょ、ピーマン、さといも、かぼす、クリーンピーチ、茶、豊のしゃも等があります。

現在、本市では「豊かな自然と文化を未来につなぐやすらぎ交流都市」の創造をテーマに、

1. 行財政基盤の強化
2. 個性と魅力ある地域づくり
3. 住民が主体の協働のまちづくり
4. 生きがいと安らぎ、そして快適さを実感できる里づくり
5. 働きがいのある産業基盤づくり

をまちづくり基本構想の主要な柱として位置づけその実現を目指している所です。

さて、雪舟さんとのかかわりについてですが、本市は約400年間続いた豊後大友氏の発祥の地といわれ、大友氏にまつわる多くの物語や史跡が残されています。雪舟さんは1476年この大友の時代の15代目当主親繁<sup>ちかしば</sup>の時代に豊後の国を訪れ、かつて学んだ明国の長江をしのび大野川を上っているうちに「沈墮の滝」に出会い、眼前に迫る巨漢に心を奪われ、雪舟の画の基調となる生涯で記念すべき作品「鎮田<sup>ちん</sup>田<sup>た</sup>瀑<sup>ばく</sup>図<sup>ず</sup>」を実景画として描いたわけであります。

この画聖雪舟が描いた「鎮田<sup>ちん</sup>田<sup>た</sup>瀑<sup>ばく</sup>図<sup>ず</sup>」の「沈墮の滝」は大野川の本流にかかる高さ17m、幅110mの雄滝と高さ18m、幅4mの雌滝の2瀑からなり、「豊後のナイアガラ」と呼ばれ雄大な景観をなし、滝壺には、大蛇が住む

という伝説もあり、神秘に満ちた滝でもあります。

こうした背景をもとに地元ではこの美しい景観を町の財産とし地域起しに役立て第五回雪舟サミットが開催された平成6年に地域が一体となって「ちんだ滝の会」が発足された所です。以来この会が中心となって枯渇したちんだの滝の落水の実現を始め公園整備等地域住民が主体となって地域づくり活動が活発に行われるようになり今年もつい先日10月29日に13回目の雪舟祭りが盛大に開催された所であります。

また、第5回雪舟サミットの開催を契機に雪舟さんの心に少しでも触れようと行政による「水墨画教室」を開催するなど取り組んできたところであります。

これまで平成10年の国民文化祭での水墨画作品展の開催、更には平成13年の全国植樹祭での天皇皇后両陛下の行幸啓での水墨画作品の紹介など雪舟と水墨文化に深くかかわってきたところであります。

それでは、今回のテーマであります「協働する魅力ある地域づくり」についてお話させていただきます。

本市は、真名野長者、宇田姫、緒方三郎などの伝説の人物が伝承され、歴史・文化の礎となっています。その中でも真名野長者伝説は韓国益山市との文化交流に発展し、国際交流にも貢献しているところであります。

こういった伝承は人により伝えられ地域のまつりや文化にひろく反映し、それぞれの地域の人々の活力となっています。NPOや地域づくりの方々の熱意は合併してからもさらに増しており、地域の特性や資源をいかしたさまざまななかたちとして地域づくりに生かされています。

このような、市民が主役となって行うまちづくりには、



市としましても財政的協力は厳しいものがありますが、その市民が使う体力の一部を知恵や汗としての協力は惜しみなく行いたいと考えています。

豊後大野市の元気は市民であります。その元気なネットワークをひろめ、協働する魅力ある地域づくりを推進したいと思います。

本日はこのサミット会議でそれぞれの市や町のまちづくりについて多くのことを学んで帰りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

最後になりましたが第11回雪舟サミットの開催にあたりまして、ご尽力いただきました開催地山口市及び関係者の皆さんに厚く感謝申し上げ、豊後大野市の近況報告とさせていただきます。

誠にありがとうございました。

それでは、当市の紹介を本市ケーブルテレビ局作製によるビデオにて行わせていただきたいと思います。

### (益田市)

皆さん、こんにちは。島根県益田市長の牛尾でございます。よろしくお願いいたします。

ここ山口市にて、5市1町の関係者の皆様が一堂に会して第11回雪舟サミットが盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

益田市は、島根県の最西端に位置し、山口県境・広島県境に接した、面積は733平方キロメートルと、島根県で一番面積の広い自治体でございます。今回の開催地の、ここ山口市から国道9号線沿いに、北東に約80km先にあり、車で約一時間半と経済的にも、文化的にも山口市と深いつながりがあります。

益田市は、前回、川崎町でサミットが開催された年の平成16年11月1日に、美都町・<sup>みとちよう</sup>匹見町と合併し、新市としてスタートを切り3年目を迎えます。

この合併により、益田市の最南部には中国山地を抱えることとなり、島根県下最高峰の<sup>おそら かんざん</sup>恐羅漢山もあります。恐羅漢山の標高は、1346mに達し、一帯には、新緑に、紅葉にと目を楽しませてもらえる自然が広がっています。とりわけ、今の時期は、<sup>ひきみきよう</sup>匹見峡の紅葉が美しく、多くの観光客が県内外より訪れています。

そしてこの中国山地から、一級河川 清流高津川、二級河川 益田川の二大河川が日本海に注いでおります。高津川は、ダムのない一級河川として知られております。天然の鮎が遡上し、日本一の清流と自負しております。

益田市の特産品はバラエティに富んでいます。主に益田平野部で栽培されている「メロン」、少し中国山地寄りの美都地域の特産「ゆず」、そして中国山地と清流匹見川の源流に育まれた「わさび」が主な特産品としてあげられます。特に、益田産メロンは、大阪市場でも高い評価を得ております。

先ほど申しましたように、益田市は平成16年11月合併したところでありましたが、合併により新しい益田市の花・木を、翌年の平成17年11月1日に新たに制定いたしました。

益田市の花は、水仙でございます。鎌手地区では、水仙をテーマとした地域づくり活動により、昨年総理大臣表彰されました。

益田市の木は、榲けやきでございます。市全域に分布し、生命力があることから、今後の益田市が大きく発展することを願って選定しました。

次に、益田市の主要事業についてご紹介いたします。

益田市中心市街地活性化事業の目玉として実施しております「益田駅前地区市街地再開発事業」につきましては、昭和56年12月に都市計画決定され、今年、平成18年6月に益田駅前ビルの工事完了、7月にグランドオープンに至りました。商業施設、市の施設である保健センター、分譲マンション65戸、141室あるホテル、立体駐車場の複合施設であります。新たな益田市の交流拠点として、今後市域全体の活性化の端緒となるよう努



< 益田道路 >

めて参るところでございます。

高速道路網の整備として、益田道路及び関連道路整備を進めております。山陰道の機能を代替する道路として、現在、工事が順調に進んでおり、終点側の5.9kmを平成19年3月の供用予定とされております。

これが先ほど申しました、終点側の現在の様子です。そして、益田市と、東側の浜田市三隅町みすみちようとを結ぶ、山陰道三隅益田間につきましては、環境アセスメントの手続きが決定し、早期建設に向け働きかけを行っているところです。

益田市には、島根県西部及び山口県北部地域の空の玄関口として、萩・石見空港いわみがあり、この特性を産業振興に活用することを目的として、全体が60ヘクタールを越える「石見臨空ファクトリーパーク」が整備されております。この工業団地を中心に新規企業の誘致を積極的に進め、地元産業の振興と雇用の場の確保に努めていきたいと考えております。

次に、益田市の文化、歴史について紹介いたします。

万葉文化を代表する、万葉集最高の歌人といわれ「歌聖」と称される柿本人麿もまた、益田市のゆかりの人でもあります。柿本人麿は、益田がその誕生及び終焉の地とも伝えられており、多くの伝承を残しております。益田市民の大きな心



< 万葉文化 >

のよりどころとなっており、「人丸さんひとまる」と親しみを込めて呼んでおります。ここに挙げました和歌「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」は、益田市ゆかりの歌です。

益田市民は、本サミットの雪舟のこともまた、親しみをこめて「雪舟さん」とさんづけをしておりますが、このように雪舟さんと人丸さんは、ともに益田市ゆかりの人として、親しみを込めて、このように、かわいらしく描かれております。

そしてここは、山口県萩市との県境ですが、ここにも

雪舟さんと人丸さんが二人仲良く、益田市を訪れる皆さんを迎えています。

それでは、本サミットの本題でもある、雪舟さんと益田市に関するご紹介をさせていただきます。



皆様ご存知のように、雪舟 <トンネルの雪舟さんと人丸さん>さんは、「益田氏十五代兼堯」の招きにより、益田を二度訪れたと言われています。

1478年ごろ、最初に益田を訪れた、雪舟さんは、<sup>いこう</sup>医光寺、当時は、崇観寺といいましたが、ここの第五代の住職として迎えられました。この医光寺に、雪舟庭園が築かれています。また、この医光寺から、約600m離れたところに、<sup>まんぶくじ</sup>萬福寺がありますが、ここにも雪舟庭園があります。

このように、全国に5つしかない雪舟庭園のうち、2つの庭園が益田市にあるという、大変名誉なことでありますので、自慢をさせていただきました。



< 益田兼堯像 >

これらは、益田市にゆかりのある雪舟さんの作品です。

まず、画面左側の重要文化財「益田兼堯像」ですが、益田氏十五代当主 兼堯の肖像画でございます。ふるさと創生事業により購入し、現在益田市が所有しております。



< 四季花鳥図屏風 >

画面右側の重要文化財「四季花鳥図屏風」は、雪舟さんが、益田兼堯の孫の宗兼に家督相続の祝賀として、描

いて贈ったものといわれております。京都国立博物館が所有しております。

益田兼堯像・四季花鳥図屏風とも、山口県立美術館の特別展にて現在公開されておりますので、明日ご覧になられたらと、思います。

雪舟さんは、晩年、再び益田の地を訪れ、1506年（永正3年）87歳で、益田市の山寺東光寺、現在の大喜庵で死没したという有力な説があり、ここに雪舟さんのお墓と言われているものがあります。

益田市は、中国の寧波市と友好交流を進めています。これは、皆さんもご存知の通り、雪舟さんが1467年に中国へ渡られ、寧波市の天童寺で修行をされました。これをご縁として、平成3年に友好交流議定書を結びました。以来、毎年交互に友好代表団を派遣するとともに、相互少年交流事業を行っております。

1506年に益田の東光寺で、雪舟が亡くなったという説から、昨年益田市は、500年目の節目として、記念事業を実施いたしました。この事業で、終焉の地大喜庵に、「画聖雪舟終焉地碑」を建立いたしました。記念碑の碑文は、雪舟さんが、修行された中国寧波市の天童寺の方丈様に、<sup>まごう</sup>揮毫の書をいただきました。方丈様をご招待し、参列のもとに、石碑の除幕式、記念式典、<sup>だいおんき</sup>五百回大遠忌などを盛大に執り行いました。

また、雪舟の郷記念館において、特別展「雪舟（せっしゅうさん）」を開催いたしました。

では、最後に、今回の雪舟サミットのテーマに関して、益田市のまちづくりについて紹介いたします。

益田市は、平成6年に「歴史を活かしたまちづくり計画」を策定いたしました。これは、昭和58年の山陰豪雨災害に見舞われたため、防災都市構想として道路整備事業が始まりましたが、この道路が縦断する三宅御土居跡の史跡の重要性が問われたことが契機となり、市民の声を反映したこの計画を策定しました。

まちづくりの目標を「歴史を活かし、自然と生活が調和するまちづくり」とし、町並の修景計画、参道等の歴史的なみちすじの整備計画などが盛り込まれています。この計画においては、文化の拠点である雪舟庭園のある医光寺、益田氏の政治の拠点である<sup>みあけおどいあと</sup>三宅御土居跡と、七

尾城跡の三点を結ぶトライアングルを「歴史の軸」として、これからのまちづくりを進めることといたしました。

この「益田市歴史を活かしたまちづくり計画」に基づき、国土交通省、当時の建設省の「歴史的地区環境整備街路事業」いわゆる、歴みち事業により、このような中世文化を偲ばれる道路整備を行いました。萬福寺前は、中世当時の参道を感じさせる遊歩道を整備しました。暁音寺前きょうおんじの通りについては、鍵曲がりの道を拡幅しましたが、当時の鍵曲がりを石畳で残しております。

中心市街地活性化法により、平成13年3月に「益田市中心市街地活性化基本計画」を策定しましたが、この計画も、益田の歴史・文化的資産を最大限に活用することをコンセプトのひとつとし、このテーマを掲げております。先ほど申しました、「歴史の軸」トライアングルを含めた地域を、「歴史・文化を活かしたまちづくりゾーン」とし、昨年オープンしました、島根県芸術文化センターとともに、点在する史跡をつなぎ、人々が歩いて回遊できる仕掛けを作ることを目指しております。

平成16年6月には、第1回の地域再生計画認定授与式が開催されましたが、「益田市歴史・芸術文化・観光のまちづくり再生計画」が認定され、小泉総理から認定証が手渡されました。この計画は、益田市の持つ歴史・芸術文化の資産を活かし、益田駅前再開発事業と島根県芸術文化センターとの連携により、にぎわいを再生する計画ですが、この認定により、国の支援を受け、益田城館跡国指定に係る公有地化整備などの事業を進めております。

益田市・美都町・匹見町の合併後の新市の礎となる「新市建設計画」においても、今回のテーマである、文化・歴史を継承し、未来を創造する観点において、重点施策が挙げられております。新益田市の「歴史と文化のふれあい交流拠点」をもとに、地域の歴史文化を幅広く情報発信し、歴史文化を通じた交流の拡大を図るとともに、新しい地域文化の創造と育成を進めることを目指しております。

昨年、17年10月にオープンしました「島根県芸術文化センター」がまさに、歴史文化のふれあい交流拠点のひとつであります。島根県西部をはじめとして、山陰

一帯に見られる独特の、赤い瓦を約28万枚、全面に使って建設された、美術館とホール機能を併せ持つ複合文化施設です。愛称は、グラントワで、フランス語で「大きな屋根」を意味します。公募により決定されました。

グラントワを益田市の新たな文化の発信地として、益田市の万葉文化・中世文化の息づかいを今に伝え、また、新たな文化の発信を目指しているところであります。

### (山口市)

最後となりましたが、山口市長の渡辺でございます。本日は、雪舟没後500年の節目となります今年、第11回雪舟サミットを本市で開催できますことに、改めて喜びを感じておりますとともに、ここにお集まりの皆様にご挨拶を申し上げます。

さて、本日のテーマについてお話しいたします前に、本市の概要について簡単にご説明いたします。

本市は昨年10月に、山口市、小郡町、秋穂町、阿知須町、徳地町の1市4町で合併をいたしました。人口は約19万人、市域の面積は約730平方キロメートルとなりまして、現在、新たな山口市としてのスタートをきって、1年余りが経過したところでございます。

交通面で申しますと、山陽自動車道や中国自動車道といった高速道路や山陽新幹線の新山口駅がございまして、広域交通の利便性が高い高速交通ネットワークの整った環境にございます。産業・経済面では、テレビ・ラジオ局などの情報・通信施設が集積しておりまして、情報サービス業の従事者数は県内でもっとも高くなっております。



また、文化・交流面では、室町時代に西国一ともいわれました守護大名大内氏の歴史遺産が多く残り、この時代には雪舟、フランシスコ・サビエルなど多くの文化人が交流した地でもありますほか、伊藤博文、木戸孝允など明治維新时期に登場する人物の遺産・エピソードも数多く存在する歴史文化都市であります。

その他、まちなかには山陽路随一の湯量と歴史を誇る湯田温泉がございまして、多くの温泉宿泊施設が集積しております。

特産品につきましては、大内氏の栄えた室町時代から受け継がれております大内塗りや外郎がございましてほか、戦国時代末期、毛利氏の時代に萩で始まったといわれ、明治期になって山口でも制作されるようになった山口萩焼といったものもございまして。

観光名所や旧跡につきましては、第25代大内義弘<sup>よしひろ</sup>を弔うために建てられました国宝瑠璃光寺五重塔や国指定の史跡及び名勝である常栄寺庭園いわゆる雪舟庭、あるいは大内氏の庇護を受けて山口で布教活動を行いましたサビエルの記念聖堂のほか、幕末から明治維新の山口の歴史を語る市の指定史跡であります「十朋亭」や明治の元勳などが訪ねました旧料亭を移築し、再建いたしました「山口市菜香亭」などがございまして。

続きまして、山口と雪舟とのかかわりについて、少しお話ししたいと思います。

山口と雪舟についてお話するとき、やはり大内氏の名を抜きには語れません。大内氏は、周防を中心とした守護大名で、その政治の中心は今の山口市に置かれておりました。はっきりした事は分かりませんが、雪舟が初めて山口に来たのは、1455年頃といわれております。この当時の大内家の当主は第28代大内教弘<sup>のりひろ</sup>で、山口は経済的にも文化的にも発展期にある頃でございました。特に大内氏の経済を支えておりましたのは明との貿易でありましたことから、明に渡って<sup>が</sup>画の勉強をしたいという雪舟の思いが、山口を訪れる大きな要因になったのかもしれない。山口に来た雪舟は、1467年遣明船で明に渡り、帰国後は、日本各地を漂泊しながら作画・作庭を行いました。雪舟庭は、第29代大内政弘<sup>まさひろ</sup>が、室町時代中期、雪舟に依頼し築庭したものとされておま

す。三方を林で囲まれた庭は、水と石に主体がおかれ、簡素にして豪放、雪舟の山水画そのままの名園としてその名を知られております。

市の指定史跡である「雲谷庵跡」は、雪舟が山口に滞在した時のアトリエがあった場所ございまして、国宝<sup>さんすいちようかん</sup>「山水長巻」、<sup>はぼくさんすいず</sup>「破墨山水図」、<sup>あまのはしたてず</sup>「天橋立図」など多くの作品をここで描き、1506年86歳でここ雲谷庵において没したといわれております。また、現存する雲谷庵の建物は、明治17年に再建されたものでございまして。

山口の概要についてはこれぐらいといたしまして、本市のまちづくりにおける取り組みをご紹介したいと思います。

まず、地域ごとに申しますと、旧山口市地域におきましては、先ほどから登場しております山口のまちの基礎を築いたともいえる大内氏の時代から脈々と受け継がれております歴史と文化を継承し、これらを活かしながら、新たな交流と文化が芽吹くまちづくりを目指した取り組みを行っておりますほか、山口から新たな芸術文化を発信する施設といたしまして、平成15年11月に「山口情報芸術センター」をオープンさせまして、様々な事業展開を通じて、文化性あふれるまちづくりの実現を目指しておるところでございまして。これらにつきましては、後ほどもう少し詳しくお話ししたいと思います。

次に、旧小郡町地域におきましては、本市のみならず、本県の重要な交通結節点であるという地勢を活かしまして、新山口駅を中心とした新たな都市機能集積を促進するための「新山口駅ターミナルパーク」の整備に向け、その構想策定に着手したところでございまして。

旧秋穂町地域におきましては、海洋資源を活かした交流の促進を図ることとしており、特産品の車えびをメインにしたイベントであります「えび狩り世界選手権」は、県内外から多くの参加者を集め、盛り上がりを見せているところでございまして。

旧阿知須町地域におきましては、2001年に開催された山口きらら博の跡地がスポーツ交流公園として整備され、2011年に開催される山口国体の会場ともなりますことから、スポーツ交流拠点として、内外への発信力を高めていくこととしております。



旧徳地町地域におきましては、その豊かな森林資源が「森林セラピー基地」として、全国27の候補地から6カ所のうちのひとつとして選定され、森林の持つ癒し効果を活用した交流と安らぎの場として、積極的なプログラム展開を行うこととしております。

それでは、今回のテーマであります「新しい価値を創り出す個性的なまちづくり～歴史・文化を継承し、未来を創造する～」という視点からお話したいと思っております。

本市の中心部には、大内氏の遺跡であります<sup>やかたあと</sup>「館跡」<sup>つきやまあと</sup>「築山跡」や「国宝瑠璃光寺五重塔」など室町時代に栄えた大内氏の文化財や、「十朋亭」「山口市菜香亭」をはじめとする幕末・明治維新时期以降の歴史遺産、あるいは古くからの街道筋の街並みが残っておりまして、大内氏が都の京に憧れ、鴨川に見立てたといわれております一の坂川や緑豊かな自然環境とも相まって、独特の美しい景観が形成されております。また、大内氏の栄えた時代は、雪舟やサビエルといった文化人の交流もございまして、これらの歴史遺産や人物にまつわるすべての歴史・文化を「大内文化」という象徴的な言葉で表すとともに、大内文化の香りが色濃く残るエリアを「大内文化特定地域」として位置付けまして、歴史的遺産や伝統文化といった本市の貴重な財産を掘り起こし、次の世代へ大切に伝えるとともに、これらを活用したまちづくりを進めておるところでございます。

具体的な事業を申し上げますと、大内文化まちづくりに活かそうとする市民活動への支援や特定地域内において伝統文化を受け継ぎながら新規の事業に取り組もうとする事業者への支援などに力をいれておりますほか、一の坂川周辺の伝統的な街並み環境の整備、交流を促す動線づくりや案内サインの整備など、様々な事業を展開しております。

それらの事業の中の一つとして、町屋再生・活用事業についてご紹介いたします。この事業は、特定地域内に古くから残る使われていない町屋を修復いたしまして、再生された町屋にまちづくりの団体や新規の事業者が入ることによりまして、街並みの修景を保存すると同時に地域の活性化を目指すモデル事業といたしまして、平成15年度から取り組んでおるものでございます。現在ま



で3軒の町屋が再生され、それぞれNPO法人の事務局や若者による手づくり家具の店などに利用されております。こういった古くからの街並みを活用し、新たな事業にチャレンジしてみようという方、また、このような取り組みに協力していこうという地域の方々も増えてきておりますので、私といたしましては、今後も、市民の新たな発想・意欲を大切にいたしまして、地域の活性化につなげてまいりたいと考えております。

一方、民間が中心となって、歴史・文化を活かしたまちづくりを行おうとする活動といたしまして、「アートふる山口」という取り組みがございまして、今年で第11回をむかえる市民手作りのイベントで、古くから残る街道筋や一の坂川周辺の民家や商家を開放して、その家が所蔵する美術品や伝統の道具等を展示したり、歴史や文化を題材に趣向を凝らしたイベントを行っており、文化・芸術をこよなく愛した大内氏が栄えた時代の、その華やいだ雰囲気がかち全体に広がります。例年は10月の2日間に行われておりますが、今年は、昨日から始まっております「第21回国民文化祭やまぐち2006」の事業の一つといたしまして、来週の12日まで開催されておりますので、是非ご覧いただきたいと思っております。また、このアートふる山口の催しを、山口を訪れる方に一年を通じて楽しんでいただきたいということで、昨年、「いつでもアートふる山口」という取り組みも始まりまして、季節ごとのテーマに沿った企画展示やイベントも行っております。また、今年5月には、アートふる山口のテーマ館として、昨年度の町屋再生事業で改修した建物を利用して「大路ロビー」がオープンし、

訪れた方への観光案内やおもてなしの空間となっております。

次にもう一つ、大内文化特定地域を含むまちなかにおいて、新しい価値を創造しながら個性的なまちづくりを目指す、民間主体の取り組みについてご紹介いたします。平成16年11月に山口商工会議所が中心となりまして、大内文化特定地域およびその周辺を、住み良さとにぎわいが共存する新しいまちにするべく「新観光拠点づくりデザイン会議」を立ち上げられまして、平成17年8月には、内容をより具体化し実現性のあるものとするため、新たに「人美響（ひびく）のまちづくり推進会議」を組織されました。

人美響という言葉は、美しいままの山口を将来の子孫に残し、守り育てていこうとする熱き心をもつ山口のまち人という意味の造語でございます。

人美響のまちづくりは、山口に受け継がれる歴史的・文化的資源を発掘・保全しながら、そこに高感度なまちづくりを推進すること、また、そこに住む人々の生活を大切に守りながら、この地を訪れる人々にとっても、ゆっくり時間を過ごすことのできるまちの機能の充実を目指すこと、さらに過去・現在・未来へとつながるまちづくりを継承・発展させるため、郷土を愛し誇りに思う心を育むための人づくりを行うことを基本理念に掲げ、様々な仕掛けを考え、実施していこうとするものでございます。これらの取り組みというものは、歴史・文化を大切に活かし、未来につなげていこうとする本市のまちづくりの方向性と重なるものでございまして、私といたしましても、このような民間主体の取り組みに関しましては、大変な心強さを感じておるところでございます。

ここまで、大内文化に代表される山口の歴史・文化を継承し、これからのまちづくりつなげていこうとする取り組みについてお話しして参りましたが、本市の新しい価値を創り出す個性的なまちづくりを目指す取り組みについて、お話ししてみたいと思います。先に少し触れましたけれども、山口から新たな情報・文化を発信する拠点となる文化施設といたしまして、「山口情報芸術センター」が3年前にオープンいたしました。

当施設は、最新のメディアテクノロジーを駆使し、現

代アート、映像、アニメーション、ダンスなど多彩なジャンルの芸術表現活動を行うことが可能な文化施設でありまして、内外から招聘したアーティストによる長期滞在制作・公開事業、教育・研究機関や市民との共同プログラムなどを実施することで、様々なメディアをより身近に理解・体験・共有してもらおう事業を行っております。こうした最先端の情報技術をバックグラウンドに作り出されるアート作品や舞台芸術作品の制作・公開、人材育成のためのプログラムや日常生活に密着した情報サービス、さらには地域の教育現場や産業に関連した斬新なアイデアなどを提供することによって、幅広い「交流・創造」の空間づくりを目指しておるところでございます。

このような中、当センターは、開館以来の来館者が250万人を突破いたしまして、昨年度の文化庁メディア芸術祭アート部門においてセンター事業が入賞するなど、全国でも屈指の文化施設として定着してきているところであります。

今後さらに、センターにおける活動・取り組みが広がりをみせると同時に、山口のまちに新たな価値が創出され、ひいては、市民生活の質的向上、創造性あふれる人材の育成が進んでまいりますとともに、文化都市としてのイメージの向上、あるいは交流人口の増加にもつながっていくと確信しております。

いずれにいたしましても、これからの山口のまちづくりを考えますと、教育・文化・情報等の高次都市機能の一層の集積を図った知的・文化的な付加価値を創造する都市形成が不可欠であり、文化性あふれる豊かな住環境と広域的な集客力を併せ持つまちをつくることが重要であると感じております。そのためには、市民の想像力、アイディア、あるいは行政の力といったものを集結し、山口にしかない歴史・文化に加え、山口にしかない新たな都市の価値を創造し、様々な取り組みを通じて全国に「文化都市やまぐち」を発信して参りたいと考えております。

最後に、もう一つだけ付け加えさせていただきますと、来年は山口の生んだ詩人「中原中也」の生誕100年にあたる記念すべき年でございます。

本市におきましては、中原中也記念館の運営事業をはじめ、今年で第11回を数え、現代詩の登竜門と称されております中原中也賞の実施など、様々な中也関連の事業に取り組んでおるところでございます。来年の、生誕100年という節目の年は、本市の誇る詩人中原中也を、あらためて全国に発信する絶好の機会でございますことから、これまでになく中也関連の事業を展開いたしまして、本市の目指す文化性あふれる個性的なまちづくりを進めてまいることとしております。

その内容につきましては、中也の生誕日であります4月29日を中心といたしまして、1年を通して、文学はもとより、音楽さらには美術の分野にまで及ぶ様々な展示や公演、コンサートなどの記念事業を予定しておりますので、是非、来年山口を舞台に繰り広げられます新たな中原中也の世界に、ご期待いただきたいと思います。